



僕と姫の心の距離



砂羽月

yuuki tkhs

「僕と姫のこころの距離」

「僕と姫のこころの距離」

砂羽 月



姫君は眠っていた。

石油が燃える匂いがする暖かな空気が充満した教室。

そこで、我がクラスの姫君は眠りについていて。

僕はそんな風になっている隣の席の姫君をちらりと横目で見た。

ぐっすりとお休みになっていた。

寝息が聞こえてきそうだった。

別に寝息フェチっていうわけではないけれど、寝息は良いものだとは僕は思う。寝息のかわいさはその人のかわいさに比例するような気がするのだ。あくまで、僕の主観だけれど。

それにしても、『寝てたら起こしてね』とこれを見たらすぐに死んでも良いぐらいの笑顔で授業の前に言われたのだが、どうするべきだろうか。

「……えー、で、あるからして……」

教卓の前では、定年退職寸前の年老いた教師が教科書の問題の解説をしている。僕の苦手な国語だ。時々感じるけれど、国語の問題は作者の考えに沿って作られているのだろうか？

そんなことを考えていたら、ぼそぼそとした老教師の解説が耳に入ってくる。

だが、その解説を聞いているのはほんの数名だった。

それ以外の人たちは、窓の外を眺めていた。ぼんやりと薄暗い白色の空から、綿のような白いふわふわとしたものが大量に落ちてきていたのだ。

それは雪だった。

今年は見たことも聞いたこともないぐらいの豪雪に見舞われている。屋根の雪かきをしても、次の日にはもう雪かきをしなければならぬほどに積もっているというぐらいの豪雪。

「あーあ……またか……」

と困惑の声も教室内からちらほらと聞こえる。

けれど、そんな中でも姫君は眠っていた。

眠り姫――姫。

それは、我がクラスのマドンナ――いや、姫君と呼ぼう――の通称だ。本当の名前は「稲見玲衣」というらしいけれど、授業中にいつも眠っていることからそう呼ばれていた。もちろん、理由はそれだけではない。可愛くなければ「姫」なんていう風に呼ばれないだろう。

僕はそんな姫の隣の席に、二週間ほど前の席替えによってなってしまったのだった。いや、なってしまったというか、なれてよかった。

姫へはみんなが好意を寄せている。主に男子、だけれど。

なんといっても、あのかわいげのある寝顔。思わず守りたくなってしまいうようなか細い身体。一目見ただけで、みんなが惚れてしまうという噂は本当だったということについて最近気がついた。

なんか、自分にとってどうでもいいことだったから、全然興味がなかったのだ。

でも、今ではもう姫の虜だ。眠り姫とちゃんとおしゃべりすることが出来るんだったら、奴隷になっても良いなあ。あ、奴隷との恋のシチュエーションって結構良いなあ。

……こんな感じで、おかげさまで、もうこれ以上赤点を取ってはならない国語や英語の授業は手つかずだ。

これではいけないと分かっているんだけど、やっぱり、寝顔が見たくなってしまう。……あれ？ あ、まずい。首が、姫の方向にいつの間にか少し動いている。

と。そこで、小さな音が聞こえてきた。

すう、すう。

僕の首の動きがすぐさま止まった。

やばい。寝息が聞こえる。寝息が可愛くて、そして、寝顔はどうなんだろう。き、き、気になる！

と思ったけれど、少し冷静になってみたらこれではただの変態じゃないかと思ったので、止めておこうという結果に達した。

彼女を見ることは出来ないけれど、かわいいなあとつくづく思う。寝息ですらかわいいし、そもそも、授業中に寝てしまうだなんて、かわいすぎる。

僕はちゃんと黒板を見ている。先生の身振り手振りの動作もしっかりと見ている。

それにしても、国語の先生の声が耳に入ってこない。



そんなある日の昼の休み。

昼の休みというのは結構微妙な時間で、ここではしゃぎすぎると、午後の授業は眠りについたり、死ぬほど眠い状態で授業を受けなければならなくなってしまう。けれど、ここである程度はしゃがないと友達との親睦が深まらない。

これが、微妙である理由。

しかし、眠り姫はどうやらそんなことお構いなしのようだ。前から知ってたことだけど。姫は暖かな教室で自分の机の上に突っ伏していた。教室には姫以外は誰もいなかった。目は開いていた。起きているらしい。

よくよく目をこらしてみると、耳にイヤホンが装着されていた。音楽を聴いているらしい。

僕はその光景を教室の廊下側の窓から見ていた。所用で、他クラスまで行っていたのだ。特にしなければならないことはなくなったので、席に着くとしよう。

自分の席まで行って、座った。そのまま、僕も突っ伏した。

すると、姫はがばっと起きて、僕の机の方を向いて、眠そうな目をこすりつつ、

「ねえ、私のこと、好きなの？」

「え？」

姫は言う。

「聞こえなかったの？ だーかーらー、新海君は、私のこと好きなの？」

聞こえてるけど、とりあえず返事はしない。というか、普通、当たってたら返事なんてしないだろう。そこまで考えることが出来ないのだろうか。そこがまたなんともかわいらしいのだけれど。

「ねーえー」

もう一度、姫が訊いてくる。少ししたら、手をこちらまで伸ばしてきて、僕の肩を揺さぶり始めた。ぐらぐらする。頭が少しくらくらしてきた。結構力が強いみたいだ。

一瞬、返事をためらう。ためらうのが普通だ。でも、気になっているようだから、しかたなく、僕は姫に言った。妙に紅潮しながら、恥ずかしげに、

「……ま、まあね……す、好きですけど」

どもるような僕の返答。最低最悪の返事だと自分で思った。でも、仕方のないことだったんだと自分に言い聞かせた。

「へえ。好きなんだ。じゃあさ、」

「なんですか？」

「これは、一つ、提案なんだけどね」

「はいはい」

「私と付き合ってみない？」

「え、付き合うってあの付き合うですか」

「竹刀とかでぐさぐさと付き合うわけじゃないよ。正真正銘の、中高生とかがよく想像するような、付き合う、だよ」

「え、あ、はい、そうですか」

「そうですよ、で、どうなの？」

「……………って、ええ！」

テンプレート通りの反応を僕はした。特に計算はしたわけじゃない。こういうのも大切なんじゃないかと最近思い始めた。テンプレート通りの人生も案外悪くはないんじゃないか？

とか、よく分からないことを考えて、自分でもよく分からなくなっていた僕はとりあえず、もう一度考える。

付き合う……え、ホントですか？ あの、かの有名な眠り姫様とですか？

だったら、これは選択肢があって無いようなものじゃないか！

「つ、付き合いますよ」

恥ずかしがりつつ、本音を言った。もしかしたら、声が小さかったかもしれないなどと不安になりつつ。

「へえ、ホントに？」

「ホントに、マジで」

「じゃあ、私を大切にしてくれるってことなの……かなぁ？」

気のせいだろうか。一瞬、姫の顔がぽっと赤くなったような気がしたのだが。

「まあ、そりゃあ、付き合うわけだし、大切にするっていうか、しなきゃいけないっていうか……」

「ま、そりゃあ、そうだよなー。だって、付き合うっていうことはそういうことだもんねー」

そう言った姫の顔はまたもほんのり赤かった。何かがあったのだろうかと思案していると、会話は止まって、いつの間にか静寂の時間が訪れていた。

一度、静寂が訪れてしまうと、そこから元の状態に戻すのは難しい。それは、いくらかの修羅場を乗り越えてきたからこそ知っている。どんな修羅場かは言えないけれど。恋の修羅場というか。なんというか。

……まあ、嘘だけど。

そんなことはどうだっていいんだ。とにかく。この状態から脱しないと。ひとまず、

「じゃ、じゃあさ、こんどどっかいく？」

姫に尋ねる。デートのお誘いをさりげなくする。このさりげなさが、いくつもの修羅場を超えてきた証なのだ。

……嘘だけど。

「行くの？ いいよ。行くんだったら、私は、そうだなあ」

「ショッピングセンター？ 公園？ 図書館？」

ん？ なんて図書館なんて言葉が出てきたんだ？ デートにふさわしくない場所じゃないか？

「あ、私、図書館行きたい！ 最近、忙しくて図書館行けてないんだよねー。借りたい本あるのに」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、図書館で、いいのかな？」

「私は全然オーケーです！」

「僕も全然オーケーなんだけど」

「じゃあ、決まりだね。いつ行く？ 明日？ あ、明日土曜日じゃん。そうしようよ。あとは何時からって話だよな」

「朝の一〇時からで」

「え、なんで十時？ 普通、九時ぐらいからじゃない？」

「いや、起きるの大変じゃない？ 姫様が大変かなって思ったから」

「全然。ていうか、いつも六時前には起きてるし」

眠り姫の生活が少しだけ見えたような気がした。どうやら、規則正しく、素晴らしい生活をしているらしい。休日は何も予定がなければ、十一時とかに起きている僕とは大違いだ。

「じゃあ、九時から？ 図書館前？」

姫に確認を取る。

「そうしよー！ オー！」

姫はそう言って、握った拳を上げた。

「……これは、オーって言えばいいのかな」とりあえず、僕もそれにのって「オー」と拳を上げた。

それが終わると彼女はすぐに、イヤホンを耳に入れて、一人の世界に入って行ってしまった。彼女を見つめる。

イヤホンで音楽を聴いている彼女は、彼女らしかった。



翌朝。

僕は楽園とも呼べる布団の中から仕方なく這い出た。普段ならもう少し眠りについている頃だけれど、姫との約束だから破るわけにはいかない。

這い出てから、すぐに、

「ふぁー」

と情けない声が出た。少し、涙が出た。

なんであくびをすると涙が出るのだろうか、疑問に思いつつ、僕は自室からそろりとして、キッチンへ行き、トースターでトーストを一枚焼いた。

チン。

トーストはこんがり僕好みの焼き加減になっていた。ベリーグッド。グッジョブ。

焼けたらマーガリンを塗って、ぱくり。マーガリンよりもバターの方が良かったかもしれないと少しばかり後悔したけれど、もう塗ってしまったので、引き返すことは出来ない。仕方なしに僕はトーストをかじる。

ふと、キッチンにある壁掛け時計が目に入った。

「……なんもいえねえ！」

そう。なんと時刻は午前八時五十分。ここからだと図書館前までには一〇分と少しぐらいかかるから……まずい！

僕はトーストを口にくわえて、すぐに外に出る支度を済ませた。それから、トーストをかじるが、なかなか思ったように食べるスピードが上がらない。

それでも、食べ続けた。

でも、ペースが上がらない。

「はぁ……仕方ないな……」

あと三分の一ほど残っているトーストを再び口にくわえる。肩にバッグを掛けて、靴を履いて、外に出た。

予想通りの蒼空。快晴。雲はところどころにあるけれど、全く問題なし。これこそデート日和ってのもんだ。まあ、もともとデートする場所は図書館だからほとんど関係ないけれど。ま、いいんだいいんだ。晴れてることに越したことはない。

僕は自転車に乗る。肩掛けバッグが少し揺れた。特に支障は無いだろう。

トーストを口にくわえつつ、僕は自転車で走り始めた。

ペダルを漕ぐ。

足に体重をかける。

そして、車輪が廻る。

その動作を何度も繰り返す。

心地よい風が、僕に吹きかかる。暑い夏にはぴったりなちょうど良いぐらいの涼しい風だった

。

からから。

そんな音を立てつつ、少しぼろくなってきた自転車で図書館へと続く坂道を下る。からからという音と共にしゃーという滑り降りるような音が耳に入る。さわやかな夏って感じだ。まさに、夏。

去年みたいな非生産的な馬鹿げたつまらない青春を感じない夏とは今年はひと味違うんだ！
いや、違ったものにするんだ！

そんなことを僕は心の内で誓いながら、夏って感じの曲を口ずさむ。この曲を姫は知っているだろうか。少し考えてみたが、結果は出なかった。出るはずがないのだ。だって、僕は姫のすべてを知っているわけじゃない。

しばらくすると、図書館が見えてきた。

図書館のすぐそばまでやってくると、そこからは自転車で通ることを禁止されていたので、僕は降りて、手で押して、姫と待ち合わせをした場所へと向かう。

姫は黒いワンピースを着ていた。漆黑……というか、紫色とでも言うのだろうか。いや、もしかしたら、焦げ茶色というのか……？ どうやら、僕の色彩感覚はおかしいみたいだった。病院に行った方が良いのかもしれない。

だが、今はそれどころじゃない。

「キミキミ、自転車早く置いてきてよ。図書館早く行こうよー」

「分かってるから、姫様。駐輪場に置いてくるからちょっと待ってて」

返事をする、姫が「ちょっと」と言葉を口にした。僕は駐輪場へと向かっていた足をいったん止める。

「今日は、姫って呼ばないで……『玲衣』って呼んで……」

顔が紅潮していることが自分自身で分かっているのか、彼女は少しうつむき気味にそう言った

。

「分かった、玲衣さん」

「『さん』はいらない……から」

「本当に分かった、玲衣」

「……………」

しばし、沈黙。

——うわあああああああああ！ やばいよ！ まさかすぐに名前で呼ぶことが始まるだなんて！ ホントにこれはあり得ない！

あり得ない展開の連続。僕の脳はショート寸前だった。頭から煙が出ているような気がしてな

らなかった。でも、焼けてなかった。あぶなかった。

「じゃあ、こっちも……新海君をさ……せ、晴って呼んで良い……かな？」

「ま、まあ、別にかまわないけど」

たどたどしい返事。どうしてこういう返事しかできないのだろうか。ダメな人の典型的なパターンじゃないか。

「ね、ねえ」

「……あ、」

ポーッとしてた。姫を待たせていた。やっぱり、僕はダメな人だ。

「と、図書館行かない？」

目をこちらに向けずに、僕に話しかけてくる少しうつむき気味の姫を僕は見る。なんだか、いつもとは違うかわいさがあるような気がした。

「あ、ああ、行こう」

「じゃ、先行くね。なんか考え事してるみたいだし」

そう言って、姫は僕を置いて、てくてくと図書館の入り口へと向かって行ってしまった。今さっきまでの僕は考え事をしているように姫には見えていたらしい。あながち、間違いじゃないけど……。

さっきみたいにまた姫を待たせてしまっはならないから、僕はすぐに姫の後を追った。



図書館の中は少し寒かった。本の保存にはちょうどいいぐらいの温度なのかもしれないけれど、これは少しばかり寒い。

それが原因なのか、あまり人はいなかった。まあ、こんなしょぼくて小さな図書館に来る人なんて、限られてる。相当な物好きか、お金を節約したい人かのどちらかだ。

姫はもう、たくさんの蔵書に目がくらんでいた。中に入ってからわずか一分ほどで。すぐさま、姫は僕を置いて、自分が興味のある分野の本が置かれているコーナーへと移動して行ってしまった。僕もその後をついていく。

まず始めに、姫が選んだのは小説コーナーだった。ライトノベルと呼ばれる、アニメみたいな絵柄の挿絵のついた文庫本や、ハードカバー、ノベルスなども置いてあった。普段、あまり図書館に来ないから、新鮮な気持ちだった。

姫は結構真剣なまなざしで、本を品定めしていた。本が好きなんだなあと思う。僕は普段は音楽をががん聴いてるから、本なんてものは読まない。そもそも、活字を見てると頭が痛くなるし、辛いし。

姫が長いストレートでさらさらな髪を耳にかけた。かわいい仕草だった。かなり胸がどきどきした。

こうして、姫のことを見ていると、なんだか、僕と姫はやっぱりこうするべきではないのではないか

とを考えてしまう。僕と姫とでは住んでいる場所が違うような気がするのだ。

でも、せっかくのデートだ。……たぶん、デートだ。少なくとも僕はそう考えてるし、姫もそう考えてると思う。だから、今は――今だけは楽しもう。

「……どうかした？」

「またもや、自分の世界に浸っていたらしい。」

「いや、なんでもないよ」

「じゃあ、さ。次、絵本のコーナー行っても良い？」

「え？ 絵本？」



「妹がさ、まだ幼稚園生でね、絵本とかを時々『ねえーおねーちゃん何か本読んでー』ってねだってくるんだけどね」姫には妹がいるらしい。「それが、断れなくて」

「どうやら、姫が可愛い趣味を持っているわけではなかったようだ。ちょっと期待していたのだけれど。彼女は絵本のコーナーに着いた途端にすぐさま品定めを始めた。」

「妹とは仲良いの？」

「全然。でもさ、ほら、お姉ちゃんだからやらなきゃいけないじゃん？」

「兄しかいない僕にはよく分からない感情だ。兄はそんなことを思っているのだろうか。いや、思っていないに違いない。そんなに兄はやさしくない。」

「そうなんだー」

「そう言っておいた。それからすぐに姫はまた作業を再開した。」



姫は窓口で貸出の手続きを行って、小説を二冊と絵本を三冊借りた。図書館には休憩スペースというのが設けられているので、そこで少し飲み物でも飲みながら雑談でもしようということになった。

「ねえ」

話しかけられた。とりあえず、ぐびり。缶のジュースに口をつける。缶には少し水滴がついていた。

「あのさ、私との今日のデート楽しかった？」

「楽しかったよ。もちろん」

「即答。」

「ホントに？」

「ホントに。マジで」

「嘘だね。顔が嘘ついている顔だもん」

「凶星だった。でも、嘘をつく。」

「いや、ホントに」

「分かってるんだよ。それに、嫌われちゃうとか思わなくて良いよ。だって、私も今日のデートつまらなかったし」

しばしの沈黙。それを姫は少ししてから壊した。

「やっぱり、ああいう関係性が私たちは一番良いのかもよ。席が隣で、普通の会話をしてるああいう関係が」

「.....そうかもしれない」

僕もその意見には賛成だった。

僕は時折、姫と差があることを感じていた。

そう、たぶん。

僕と姫の心の距離は、遠かったのだ。



それから。

僕と姫は、休憩スペースから出て、出入り口の前で別れた。

なんだか、空がさっきよりも蒼いような気がした。



あれから数日が過ぎた。

国語の教師の指示で、僕は窓の外を見つつ、教科書を開く。このところ、晴天が続いていたのだけれど、今日からまた雪景色に戻ってしまった。雪かきが大変だけど、たまにはこういうのもいいかなと感じた。

「えー、じゃあ、キミ。ここ読みなさい」

いきなり、僕のことを指さして、国語の教師は教科書を読めと指示してきた。僕は仕方なく、教科書を持ち、立ち上がる。やっぱり、国語は好きになれない。そして、僕はしっかりと教科書を読み、席に着く。

教科書を机に置いて、ふと、隣の席を見た。

眠り姫が、かわいらしい寝息を立てながら、眠っていた。

Today Is A Beautiful Day...